

関西大学大学院工学研究科 学生員 ○衛藤貴朗
関西大学工学部 正会員 三浦浩之
関西大学大学院工学研究科 正会員 和田安彦

1. はじめに

都市域における水辺空間は、現在残されている数少ない貴重な自然空間であり、情操、文化、教育、あるいはレクリエーションの場として自然な水辺空間を保全し、人々がアクセスしやすい環境をつくることの必要性が幅広く理解されてきている¹⁾。また、水辺等の自然空間を利用することを通じて、自然環境に対する意識を高め、環境教育の場として活用する取り組みがなされている²⁾。そこで本研究では、身近な都市域の水辺空間として、市街地に位置するため池公園で、アンケート調査を行いたため池公園来園者の利用状況や公園施設に対する意識を把握し、整備に関する基本的情報を入手した。

表－1 アンケート概要

項目	内容
調査期間	平成 12 年 9 月上旬～11 月中旬
有効回答数	272
アンケートの内容	① 回答者属性 ② 来訪頻度、来訪目的 ③ 公園状況(水質、におい、水鳥の飛来等)に対する意識 ④ 給餌活動の禁止についての意識 ⑤ 公園施設に対する要望等

2. 対象ため池概要

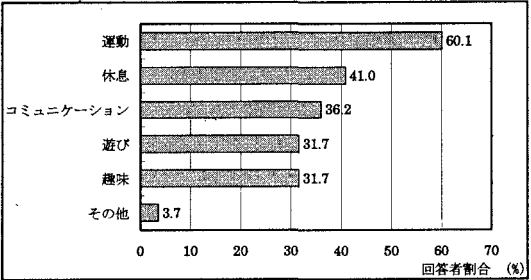
本研究で対象とする A 池は都市域に位置するため池公園である。公園面積は 30ha を有し、周辺は住宅地に囲まれている。A 池には毎年多くの渡り鳥が飛来することから、メディアにも数多く取り上げられ、自然豊かな野鳥とふれ合える公園施設として、周辺の市民のみならず遠方からも多くの人々が訪れる都会のオアシスとなっている。しかし一方で A 池では水質の汚れが問題となっており、富栄養化の進行によるアオコの発生や魚類の大量死等の問題が生じている。

表－2 回答者属性

属性項目	属性内容
男女比	男性(56%), 女性(44%)
居住地域	市内在住(60%), 市外在住(40%)
年齢	10 代(5%), 20 代(22%), 30 代(28%), 40 代(10%), 50 代(14%), 60 代(18%), 70 代(3%)

3. アンケート調査概要

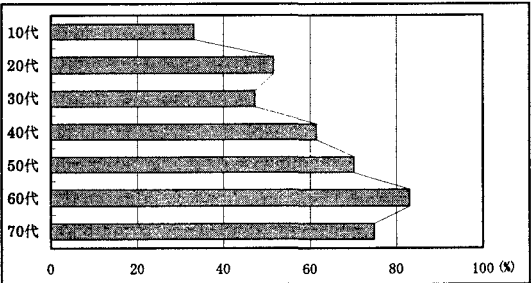
アンケート調査は A 池利用者を対象として行った。調査方法としては、A 池利用者に対して直接面談して、協力をお願いする形でアンケート調査を行った。調査概要を表－1 に、回答者属性を表－2 に示す。特徴として市外在住者の割合が 4 割を占めることがあげられる。



図－1 利用目的

4. 公園状況に対する利用者の意識

公園の利用目的に関する回答者割合を図－1 に示す。「運動」と答えている回答者が最も多く、公園施設が運動公園としての機能を持っていることが分かる。「運動」と答えた回答者の年齢別の割合を図－2 に示す。年齢が高く



図－2 「運動」回答者の年齢別の割合

なるにつれて、回答者割合が高くなっていることが分かる。特に高齢者の割合は高く、高齢者の多くは公園を訪れる目的の一つを「運動」としていることが分かる。また、「休息」や「コミュニケーション」の場として利用していることから、公園施設が心落ち着ける場所として位置づけられている。

次に図-1において回答割合の高かった「運動」、「休息」の内訳の割合を図-3、図-4に示す。「運動」については、「散歩」と答えている回答者が多かった。これは、池の外周に散歩道が整備されているためと考えられる。「休息」については、「水辺を眺める」、「景色を見る」の回答者が多かった。公園の風景は利用者に安らぎを与えていると考えられる。

利用者の水質に対する意識を図-5に示す。水質に対しては汚い（「やや汚い」、「汚い」、「とても汚い」）と感じている利用者が7割を占める。利用者の水質に対する評価は低いと言える。しかし、前述のように水辺を眺めることを来園目的とする利用者がいることから、利用者は水質の汚さを感じていても、水辺を求めて行動を起こしているが分かった。

水鳥が飛来することについての利用者の意識を図-6に示す。「生き物と接する良い機会」、「自然環境が豊かである」、「子供達の情操教育のために良い」と答えている回答者の割合が高い。利用者は生き物とのふれ合いに良い印象を持っており、生き物を身近に感じることで自然環境の豊かさを感じていることが分かった。また、子供の感性を育むために水鳥とふれ合う機会を持つことは良いと考えられていることが分かった。

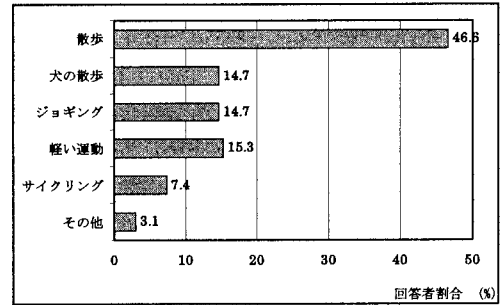


図-3 運動の内訳

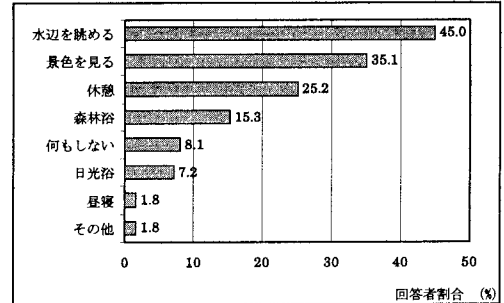


図-4 休息の内訳

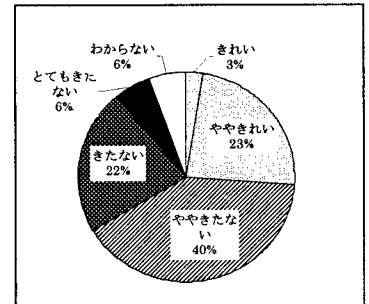


図-5 水質に対する意識

5. おわりに

都市域に位置するため池公園においてアンケート調査より、利用者のため池公園に対する利用状況、意識を把握することができた。利用者は周辺住民だけでなく、市外からの利用者也存在した。利用者はため池を様々な目的で利用しており、利用価値の高い公園であると言える。また、水鳥の存在について利用者は、生物と接する良い機会であると認識しており、自然空間の中で水鳥とふれ合うことができることに良い印象をもっていた。一方、水質に対する利用者の評価は低く、利用者のマイナスイメージを改善するためには、水質対策が必要であると考えられる。今後は利用者のため池公園に対する意識をより深く考察し、様々な面から住民の意識の変化や行動、心理について解析を進めていく必要がある。

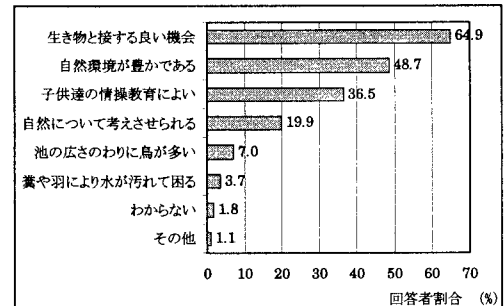


図-6 水鳥に対する意識

【謝辞】最後に本研究を行うにあたり、アンケートに協力していただいた住民の皆様方、ならびに調査にご協力頂いた研究室の方々に謝意を表します。

【参考文献】1) 畔柳昭夫, 渡邊英俊, 都市の水辺と人間行動, pp15, 1999 2) 環境省ホームページ, <http://www.env.go.jp>